

遠くを眺めれば自由

冬の間、渡植は「労働と貨幣」と題する論文を書き上げた。

貨幣を知らない社会内の労働と、貨幣に引きずられている社会内の労働とが、同一であるはずがない。今日までの経済学はマルクス経済学も含めて、この両者の活動を同一視してきた。貨幣と道連れの労働を見慣れている近代人は、こうした労働が歴史貫通的であると考えているが、それは商品の使用価値が歴史貫通的と考えるのと同じように大きな誤りである。

渡植はこのような問題意識にたち、「貨幣が経済価値の完成体である以上、それが労働との接触において、これを厭わしいものとするのが当然の帰結であることを悟らされたのであるが、貨幣がその触手を介して、ひとり労働だけでなく、あらゆるものを厭わしきものに化することも亦、必然である」という結論を導きだした。



しかし、八十の歳に大学を退官し、非常勤講師の身分になっていた渡植は論文を発表しようにもその場所がなかった。

こうした窮状を教え子の一人の中山保男に率直に伝えると、横浜に住む中山が原稿をワープロに打ちこむことを快諾した。活字にしたものを必要な数だけコピーして、読んでもらうようにすればよいという。老学者は五十年をこえた付きあいがある中山の厚意に甘えることにした。

中山は渡植が昭和十六年、朝鮮の商業学校の校長の職を辞し、再び横浜商業専門学校（現横浜市立大学）に教授として奉職していたときの教え子である。

渡植はその後昭和十九年四月、天野貞祐からの誘いで、天野が校長をしていた甲南高等学校（現甲南大学）へ栄進する。が、終戦まじかの七月、天野から解雇された。

渡植はこのときの事情を回想記に短く記している。私淑していた天野は、ある人物の^{かいらい}傀儡になりさがっていた。学長としての天野の評判は散々だった。渡植は学内の派閥争いに巻きこまれ、「崇拜してきた恩師に裏切られ、敝履の如く捨て去られた」とある。

失職と戦災という二重の痛手を受け、尼崎で家族はなんとか生きのびた。

昭和二十一年三月、渡植は福井師範学校に職を得て家族は福井の鯖江に引越した。

五年後、渡植は富山大学へ移りここで定年を迎える。そして、定年の前年の昭和三十三年、苦勞をかけっぱなしだった妻の善を病気で亡くした。

地理的なことで、一時疎遠になっていた中山との子弟関係は、昭和三十四年に渡植が神奈川大学に勤めるようになってよみがえる。

このころ、中山は横浜市内の小学校の教員をしていた。六角橋に転居してきた恩師に友人を介して、後妻に香誉子を紹介したのも中山である。

権現の自宅のまわりの景色がすっかり春めいてきた日、老学者は書きあげた原稿を整理し、中山のもとへ発送した。

それから一月後、老学者の論文が活字になって帰ってきたが、そのころ渡植は次のテーマ、学問論の社会的考察にとりかかっていた。

五月五日、渡植の満八十四歳の誕生日に、福井の鯖江から列車を乗りついで木水育男がやって来た。

出版の祝いもかねた夕食の席の話題は、渡植がすごした福井時代のことになった。

木水は話好きで、しゃべりだすと話題は際限なく広がっていく。それも、渡植のように形而上学的な分野の論理や思考が必要な話題ではなく、体験にもとづくきわめて具体的な事柄を身振り手振りをいれてとうとうと話すので、木水のまわりにはいつも人が集まっていた。

渡植は木水の熱っぽい口調の懐古談に耳を傾けながら、福井へ行って始めた師範学校の学生たちとのスピノザの輪読会のことを思いだしていた。

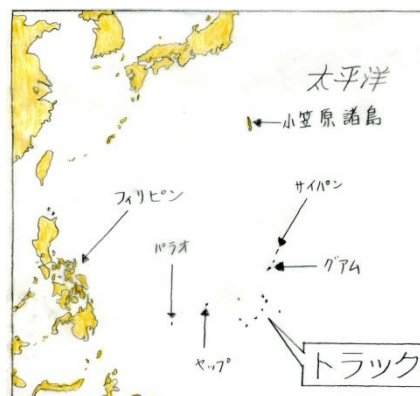
夜、小学校の教室を借りて始めた自主的な勉強会だったが、噂を聞いて近在の教師や青年たちも参加するようになった。木水もその一人で、かれは輪読会のあと、トラック島での出来事をよく話した。その話がとても愉快で、学生だけでなく渡植も木水の体験談を愉しみにするようになったものだ。

木水は昭和十五年に福井師範学校を卒業して、訓導として八カ月ほど小学校に勤務したあと、富山の連隊に入隊。昭和十八年十二月にトラック島へ派遣され、この島で終戦を迎えた。

輪読会での話はこのときのものだが、渡植がいまでもよく覚えているのは、マンゴーの木の下で手をたたく老人のことである。

木水は愛の問題を、「してほしい、してやりたい、」が大事だといい、その事例として老人の話をしたのだ。

日本兵は木に登って枝をたたき、マンゴーの実を地面に落とす。実は二三日おくと、熟れてとっても美味しくなる。ところが、現地の老人たちはマンゴーの実が欲しくなると、木の下に一日座ってパーン、パーンと手をたたき、実が落ちてくるのを待っている。食べたいという思いと、食べられたいという願いが一致した



ときに、実は地上に落ちて老人のものになるというのである。

木水は昭和二十一年四月に復職したが、GHQの指令で教壇には立てなかった。

毎日、学校へ出勤し職員室の片隅の席で教科書と百科事典の墨ぬりをして過ごす。すると突然、GHQの民間情報教育局の兵士がジープで学校へやって来る。兵士が表から来ると裏の用務員室へ、また裏門から来たときは、表門から逃げだし、近所の農家に身を隠した。出征のときの英雄扱いとは雲泥の変化である。木水は自分のおかれた屈辱的な境遇にとまどい、敗戦を境にすっかり変わってしまった価値観や思想についていけず、周囲への不信感を募らせていた。かれはこのころ毎夜裏の畑へ出ると、自らの進む道を探しあぐねて号泣していた。

そのようなおり、師範学校出の教師を再教育する認定講習会で木水は渡植に出会ったのである。

そのときの渡植の講義は、「アテナイの民主主義」であった。が、内容そのものよりも、木水の感動は画家としての直感からくるものだったという。

だれもが民主主義を口にする時代になり、木水は豹変した人々の理屈や理論が単に看板を塗り替えただけで、本物でないことは百も承知だった。かれの周囲の者はみな生きるために、節操もなく時代に迎合していたのだ。この人の説く民主主義は違う、と木水は直感したのである。かれのなかに、「ここに本物の日本人がいる」という思いがこみあげ、身体がふるえ、あふれでる涙をぬぐおうともせず、木水は渡植に見入っていたのだ。その渡植にとって、師範学校から福井大学教育学部へと改革された時代にすごした福井の鯖江での生活が、かれの理想や理論が実践できた最も楽しい日々であった。



水木 育男

昭和二十二年、学制改革で新制の附属中学が創立されたが、このとき創立の責任者に抜擢されたのが渡植である。年は五十に近くなっていたが、体力には自信があった。かれは封建的な北陸の風土のなかに、新風を吹きこもうと改革に着手した。

渡植は朝鮮での校長経験から、「教育は人事である」という信念があった。

かれは教師集団ができるだけ多様な人材から構成されることを理想とした。そこで、旧制大学出の教員、小学校の訓導、それに職業科の教員をそれぞれ三分の一の人数割合で採用し、国語と語学、それに芸術と職業の授業を重視した教育過程を編成した。芸術科の教員には、輪読会で知合った木水に特別に声をかけた。また附属中学校と大学の教員の相互の交流を図り、大学側からはできるだけ多くの教員が中学校の授業を担当するように協力をよびかけた。しかしこれには大学の教員からの反発が年毎に強くなり、渡植が昭和二十六年に富山

大学へ転出する間接的な原因になった。

また戦前の師範教育そのものに批判的な渡植は、県の教育委員会から推薦される師範出の教員を採用しないので、福井の教育界では困った人物が来たものだとしだいに渡植を排斥しようとする動きが強くなった。

しかし渡植は学生たちに絶大な信頼と人気があった。かれの歯切れのよい声は、兵舎を改造した教室の隅々までよく透った。自由や理性、合理主義や実用主義といった言葉が陰うつな風土になじんできた青年たちの耳朶をうった。学生たちの多くは、渡植を単なる合理主義者と解するだけでなく、いつも、人間への優しい眼差しを忘れない人柄に敬愛の思いを抱いたのだった。

福井は昔から政争が激しく、猜疑心の強い土地柄だといわれていた。渡植はそうした土地に育った学生たちを前にして、「遠くを眺めれば、自由になれる」と説いた。

渡植は講義においても、旗幟鮮明だった。たとえば西洋哲学史の講義で、この当時一世を風靡した西田哲学を批判する。学生たちは初めは驚き、違和感を感じたが、ドイツ観念論の立場から諄々と徹底的に西田哲学を批判する渡植に魅せられていく。渡植は西田の人格は立派だが、学問はダメで、かえって害毒さえある、と論断した。

当然、反発する学生もいた。

これからは英語の時代だ、と師範の学生たちに語りかけていたら夜、渡植の家を訪ねてきた学生がいた。聞くと若泉敬といい昭和十九年に師範の予科に入学したかれは、英語教育はこれまで一切受けていないのだという。いまさら、英語とは何だと顔を赤らめて抗議した。

渡植は皇国史観に染まった若泉の話にじっくり耳を傾け、それからかれが辞去する際に、英語のよくできる師範の学生の名をあげて、その先輩のところへ行くように助言した。

若泉が先輩のところへいくと、先生から話は聞いているとかれは渡植から渡された英語入門のテキストを示した。これを使ってしばらく君と英語の勉強をしよう、と先輩は若泉を誘った。そしてこれが、若泉の転機となった。



若泉 敬

若泉敬はその後、東京大学を卒えロンドン大学大学院で国際政治学を専攻し、京都産業大学の教授に就任する。そして佐藤内閣時代に、佐藤首相の特命を受け沖縄返還をめぐる日米首脳交渉の舞台裏で、重要な画策をした人物として知られるようになった。

皇国民教育の申し子のような青年が、あれほどの国際人になったのだから、人間はわからないものである。

が、若泉はむしろ特例で福井や富山時代の教え子たちは、それぞれ自分の身の丈にあった人生を築いていた。木水にしろ、画家としての道を選ばず教育者として、それも晩年は精神発達遅滞児教育の専門家として大成したことが渡植は何よりもうれしかった。

昭和四十六年四月、木水は福井大学に新設された附属養護学校の副校長に抜擢された。教育課程をつくり、教師を集め、通える児童・生徒ならどのような障害の子供も引き受けた。ところが、すぐに木水は大学の特殊教育研究室と対立するようになった。

自閉症の原因は頭に血が回らないからだ信じ、毎晩子供を逆さに吊していた親がいたころである。研究室でも、まだ電気ショックを認めていた。

子供たちを観察し、同じ視線で見つめ、友情をかよわせなければ教育はできない。これが木水の実践的な教育観だった。

木水は子供たち全員に脳波検査をしようとする教授たちと対立し、学内で孤立した。

大学側は副校長は黙って座っておればよいという。渡植に相談すると、フッサール、メルロ・ポンティ、ローレンツらの著作がとどき、手紙に「心理学では、教育はできない。実践では君の方がはるかに上だ」とあった。木水は自信をとりもどした。

ところで木水は自分が取りくんできた教育の実践的な経験から、人間をチンパンジーとオラウータンの二つのタイプに分類することがあった。遠足に行くと先頭が好きで、みんなの世話をやきながら歩く子がいる。これがチンパンジータイプで、みんなから頼もしく思われもするが反発もある。これに対して、オラウータンは、集団の後をぶらぶらとマイ・ペースでついて歩く。集団のなかに入るのを好まないのだ。共に個性的だが、チンパンジーの方が仲間もできるが敵が多い。

木水は恩師の渡植はチンパンジーのタイプだと、秘かに思っている。

当時、福井の美術界には土岡秀太郎という大立者がいた。若い絵描きや彫刻家たちが吸いよせられるように土岡のもとへ集まった。

土岡は地方文化の向上を願って、北美文化協会を設立し、さらに児童美術教育の民間団体である創造美術協会を旗揚げする。

渡植はこの二つの協会の顧問になり、土岡との親交を深めた。二人はとくに古九谷の研究に熱心で、木水ら若い会員をつれて山あいの工房跡にでかけ、陶片の収集に努めていたものだ。

渡植が所蔵している藍古九谷の小皿と茶わんは、このころ地元の素封家から手に入れたもので、古九谷は専門家の間でさえまだその存在を十分に知られていなかった。



こうした文化活動はもとより、渡植はよく会員の身の上相談も引き受け数多くの縁組みもしている。美術界での渡植に対する信頼は厚く、渡植を排斥しようとする地元の動きに対して美術界が抑止力になっていた。

木水は土岡や自分のような人間がいたから、渡植は福井の田舎にとけこむことができた、といまでも思っている。

そのチンパンジータイプの恩師が、八十の高齢を過ぎてなお学問を続ける姿は敬服をこえ、驚きに近い感慨を木水に与えていた。

夜もとつぷりと更^ふけていた。

そろそろ床につこうという段になって、渡植は鯖江の自然は昔のまま残されているだろうかと尋ねた。

稲作で潤った平野を南北に切断して、いま高速道路が走っている。が、そのことにはふれず、木水が生まれ育った里山や川や畑は渡植がいたころと変わってはいないとかれは応えた。

老学者は微笑しつぎのようにいった。

福井にはまだ人間らしい暮らしがある。

それは、自然と人間が労働をとおして調和している世界が保たれているからだ。

本来、人間は自然のなかに自分たちの暮らしに役立つ使用価値の源泉を見だし、商品化されていない労働によって生活資料を作りだしてきた。しかし今日、商品経済を媒介として、自然と人間の交通は変容し、農山村で暮らす人々も資本制商品社会のしくみに取りこまれていくようになった。

例えば商品生産に適さない林業が衰退して、山村の暮らしを築いてきた自然の破壊でしかない土木工事で生活を立てている人たちの現状は、自然と人間の交通の変容を如実に物語っている。

「ぼくは、そんな大事なことをこの歳になって内山節という哲学者から学んだ」

老学者はここ最近、かれの頭をいっぱいにして内山のことをこのようにいった。

そして、つぎのようにつづけた。

かれとぼくは同じところに立っているが、内山の方がはるかに深く、問題を掘りさげている。ぼくはこの歳まで学問をつづけてきて、やっと自分の思想が

熟してきたと思えるようになったが、戦後生まれの内山が自分と共通の基盤にいることに驚きと喜びを覚えている。いくら年をとっても、新たな出あいがあるから学問はやめられないな。

木水は青年のような心情の恩師に一礼すると、床についた。



内山 節